

 書評

松下正明 総編集

井上新平, 内海 健, 加藤 敏, 鈴木國文, 樋口輝彦 編

精神医学エッセンシャル・コーパス 2

精神医学を知る

新宮一成

日本の精神医学に、根源的な問いの季節というべきものがあつた。優れた思索者たちが、対話と観察を唯一の糧として、精神を病むとはどういうことかという問いに挑み続けていた。本書の収録論文たちの年代は、1970 年代後半からの 10 年余りにわたり、操作的診断の思想が精神医学の風景を変えていく直前の、臨床的思考の豊かな成熟を伝えている。

論文には統合失調症の旧称「精神分裂病」がそのまま保存されており歴史を感じさせるが、目次はそのまま 1 冊の精神医学教科書を見るが如しである。大橋博司「精神症状学序論」、安永浩「精神分裂病の症状」、木村敏「精神分裂病の診断」、藤縄昭/笠原嘉/村上仁「精神分裂病の臨床類型」、臺弘「精神分裂病問題の歴史と展望」、宮本忠雄「言語と精神分裂病」、柴田收一「感情・気分の異常」、広瀬徹也「躁うつ病の経過類型、残遺状態と人格変化」。しかし歴史が感じられるということは、教科書として古びていることと同義ではなくむしろその反対である。

病の経験を内面から理解するということが実践的に可能であるばかりでなく、その理解を記述して読む人に伝えるということもまた可能であるということが、各論文から歴然と読み取れる。精神医学的な記述というものの本領は、診断的統計のために術語を揃えるということではなく、場と人の理解を伝えるところにこそある。理解そのものが精神療法的な役割さえも果たする。

見えないものが見え、聞こえないものが聞こえるということにすでに古の人は驚き、本人にしか分からないと諦めるのではなく、その体験を聴取し記述してきた。その記述は、読んだ人に伝わり、読んだ人の中で、その分からないはずの体験が再び立ち上がる。そのような記述の情熱は脈々と伝えられ、大橋が紹介する古代の学者の幻覚の記録も、安永や木

村が聴取した現代の患者の幻覚の報告も、今ここでそれを読む我々の中で、その意味は何かと、あらためて問いかけてくる。そして「病」の形をクリアに捉える臨床の作業があつてこそその記述は生きる。藤縄らが辿る類型学の系譜は、差異の知覚によって異常体験の実在感を鮮烈に訴え、また経過を重んじたクレベリンの情熱が論点先取の論理的過誤を内在させていながら臨床的必然性を保っていたことを臺の歴史記述が教える。人間を言語との全面的対立の中に置いて、主体性の崩壊の危機を描き出した宮本の論文は構造主義の下での卓越した精神医学的収獲であり、躁うつ病を情動と気分との深みの中に位置付けなおす柴田の論考は古色蒼然とした文体がこえて味深い。長きにわたる自験例の集積をいくつかの類型に分け、副作用も巻き込んで躁とうつの変動の経過を細やかに描き出した広瀬の論文の視座からは、状態像が変われば診断カテゴリーを変えればよいと安逸に構えているだけではないということを知らせる。

精神を病むということとはどういうことかという問いは、今もう一度問い返すべきこととなっている。精神病のもとでの精神の営みがどのようなものであるかを模索することが学問の営為として放棄されてしまふかもしれないという危機感はいくつの人にも共有されている。人間精神へのまなざしの歴史において、このまま現代が折れ目を刻むことになるかどうかは、今まだ残されている成果を我々が読み継ぐかどうかにかかっており、この危機感の下で多くの若い精神科医が本書を手にとってくれることを願う。

(京都大学大学院人間・環境学研究科)

●B5 348 頁 2013 定価 8,400 円(本体 8,000 円+税) 中山書店